

## 誰かの心に寄りそうことの大切さ

倉敷市立菅生小学校

五年生 渡邊 奏介

もしも大切な誰かがいなくなる前に、この世に残してくれた何かがあったとしたら。

その残してくれたものに、大切な人を重ね、どういう形であれ、ずっと生き続けて欲しいと心から願う。そんな当たり前のことに、ぼくは、これまで気づくことすらなかった。

今年ぼくは、けんちゃんの朝顔を植えた。けんちゃんの朝顔とは、青信号の横断歩道を渡っていたとき、右折してきたトラックにはねられて亡くなった、当時小学校一年生のけんちゃんが育て、自宅に隠し残してくれていた朝顔の種。その朝顔の種を、けんちゃんのお母さんが見つけ、「けんちゃんの朝顔」として、全国に配ってくれているものだ。その朝顔の種をぼくは、おばあちゃんと一緒に、ぼくが小学校一年生のときに育てていた朝顔の種と植えた。このときおばあちゃんは、ぼくの親せきにも交通事故で亡くなった人がいたことを教えてくれた。

クリスマスイブの朝、運転をあまり事故を起こし、「痛い、痛い」といながら、家族に見守られ数時間後に亡くなったそうだと、けんちゃんの朝顔を植えながらおばあちゃんは、

「あの子にも、けんちゃんみたいに残してくれたものがあつたらよかったのにな。」

と、言っていた。このときのおばあちゃんの言葉の意味が、僕にはよく分からなかった。その人が使っていた物なんて、たくさん残っていたはずなのに、おかしなことを言うな、くらいに思っていた。

しばらくして、けんちゃんの朝顔が芽を出した。けんちゃんの朝顔は、ぼくの朝顔と一緒にすくすく成長して、ぼくの朝顔とは違う小さな青紫色の花を咲かせた。ぼくは、その朝顔を見て、急に、けんちゃんってどんな子だったんだろうと思った。どんな性格をしていて、どんな風にそれまで過ごしてきたんだろう。朝顔の種を家の中に隠すとき、見つけた時のお母さんのどんな顔を思い浮かべていたんだろう。朝顔の種を見つけたお母さんに、何て声をかけるつもりだったんだろう。それなのに、いきなり交通事故で亡くなってしまふ。しかも、小学校一年生という幼い年齢で。そのことを想像しただけで、ぼくの心はすごく苦しくなり、涙が出そうになった。

そんなことを思いながら、けんちゃんの朝顔を見ると、けんちゃんが歩むはずだった人生を、けんちゃんの朝顔のお世話をするなかで、僕が代わりにいろんなことを感じ、けんちゃんと一緒にぼくは生

きているんだと思えた。花が咲くことでけんちゃんはずっと生き続けることができるし、きつとそれをけんちゃんのお母さんも望んでいると思った。ぼくは、おばあちゃんが言っていた意味に、ようやく気づくことができた気がした。だから、そのことをおばあちゃんに伝えた。おばあちゃんは、

「そうじゃな。その優しい気持ちがあるだけで、みんな救われるわ。」と言った。

いくら時が過ぎても、いなくなったものを忘れることはできない。それが突然のことだとしたらなおさらだ。だからこそ、どんな形であれ、誰かが忘れず思い続けることで、救われる人がいると思った。大切な誰かが突然いなくなることは、想像すらしたくないし、そうなっってしまったときにぼくにできることは限られている。だけど、けんちゃんの朝顔のようなものがなかったとしても、誰かのことを思い、傷ついた人の心に寄りそい、その人と一緒に生きていくことはとても大切なことだと思った。

物を大切にする、友達を大切にする。そして、自分自身も大切にす。ちよつとしたきっかけで、意識が変わり、行動までも変わってくる。そんな当たり前のことを、けんちゃんの朝顔を通じ、僕は初めて知ることができたし、誰かの心に寄りそう大切さを学ぶことができた。

これから先、いろんなことで悩んだり、傷ついたりした人と出会わずだ。だからこそぼくは、将来、けんちゃんの朝顔から学んだ「誰か

の心に寄りそうことの大切さ」を忘れず、傷ついた人の心を少しでもいやすことのできるカウンセラーや医師になりたいと思った。

そしてぼくは今年の夏も、けんちゃんの朝顔をたくさん咲かせ、誰かにこの気持ちを伝えたいと思っている。